

健康教育を学ぶ学生における保健室登校に関する意識調査

毛利 史枝・板倉 千秋・吉本 典子・松本 禎明

九州女子短期大学専攻科子ども健康学専攻 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2015年11月12日受付、2015年12月17日受理)

要 旨

文部科学省の「学校基本調査」によると、平成25年度の長期欠席者のうち、「不登校」を理由とする児童生徒数は、小学校は約2万4千人、中学校は約9万5千人であった。不登校問題はどの学校でも起こり得ることであり、指導の結果再登校できるようになった児童生徒は例年約30%いる。中でも「保健室登校等特別の場所に登校させて指導に当たった」では小学校23.9%、中学校50.7%が効果的であったと回答している。つまり、登校が難しい児童生徒にとって、保健室登校へのニーズは依然として存在していると考えられる。

そこで本研究は、健康教育を教育保健学から学ぶA大学の学生と、スポーツ科学から学ぶB大学の学生が保健室登校等をしている児童生徒に対してどのような意識を持っているのか、書面調査にて現状と課題を分析し有効的な支援法並びに健康教者の指導者としての在り方を検討することにした。調査方法は自記式質問用紙を使用し、教育保健学について学ぶA大学の学生83人、スポーツ科学について学ぶB大学の学生129人、計212人に対して無記名で行った。

今回の研究で次のことが明らかになった。(1) A大学の学生は「特別活動へ参加する態度」について、B大学の学生は「友人関係」に関することについて最もネガティブに捉えている傾向にあることが分かった。(2) A大学の学生の意識(11位)と実際の鹿児島県総合教育センターが定義する効果的な対応(4位)での大きな相違は「保健室へ友達が行けるよう配慮する」ことであった。しかし、学生による回答と効果的な対応の上位6位までは同じ傾向であることが分かった。

以上の結果から両大学の学生がもつ「友人関係」「特別活動へ参加する態度」のネガティブイメージは将来の子どもの健康教育に大きな影響を及ぼすことが予測され、大学教育や体験学習・実習などを通して、それぞれの領域の学びの足りない部分を相互補完することが効果的な保健室登校等の支援をする上での人材養成に繋がるものと考えられる。また、A大学の学生はおおよそ保健室登校支援について理解している傾向にあったが、児童生徒同士の仲間づくりのための支援やその友達への配慮を行っていくことを学ぶ必要性があると考えられる。

I. 緒言

文部科学省は、学校教育行政に必要な学校に関する基本的事項を明らかにすることを目的として学校基本調査を毎年行っている。「学校基本調査」によると、平成25年度の長期欠席者（30日以上欠席者）のうち、「不登校」を理由とする児童生徒数は、小学校は約2万4千人（前年度より約3千人増加）、中学校は約9万5千人（前年度より約4千人増加）いたことが分かった。また、同調査から不登校の児童生徒数は小学校、中学校ともに6年ぶりに増加し、不登校問題解決には粘り強い努力が必要であると考えられる¹⁾。以上のような統計結果からも分かるように不登校問題はどの学校でも起こり得る問題であり、その改善のために様々な取り組みが行われている。

このような現状において、指導の結果再登校できるようになった児童は平成25年度では30.4%おり、例年約30%の児童生徒が学校に登校できるようになっている。特に効果があった学校の措置としては、学校内での指導改善の工夫に関する項目が多く、中でも「保健室登校等特別の場所に登校させて指導に当たった」では小学校23.9%、中学校50.7%が効果的であった²⁾と回答している。また、杉浦は、保健室登校と不登校との組み合わせとして、不登校→保健室登校→教室復帰という流れもあると述べている³⁾。つまり、登校が難しい児童生徒にとって、学びの場として学校が位置付く形としての保健室登校へのニーズは依然として存在していると考えられる⁴⁾。

さて、養護教諭養成課程の学生は免許状取得のため養護実習に行くこととなる。実習の拠点が保健室であると考えられるため、とりわけ学校生活のほとんどを保健室で過ごす保健室登校の児童生徒と関わることが予測される⁵⁾。

そこで本研究では、保健室登校自体や保健室登校等を行っている児童生徒に対して学生がどのようなイメージを抱いているのか、またそのイメージを持った背景にはどのような要因があると考えられるのか推測する。その際、A大学で教育保健学について学ぶ学生とB大学でスポーツ科学を学ぶ学生にどのようなイメージの違いがあるか比較検討することで、両大学がそれぞれ取り入れるべき学びについて考察する。なおA大学の学生は将来養護教諭として、B大学の学生はスポーツ指導者として、子どもの健康教育に携わる可能性のある学生である。また養護教諭養成課程の学生において保健室登校等の実態をどの程度把握しているのか、実際の有効的な支援方法（鹿児島県総合教育センター定義⁶⁾）と学生が答えた有効的だと思われる支援方法を比較検討することによって、最終的に今後の保健室登校支援のあり方について推測する。

II. 調査方法

1. 調査目的

教育保健学を学ぶ学生とスポーツ科学を学ぶ学生の共通の学びには健康教育があるが、そ

れぞれ違う立場から見た時に保健室登校等をしている児童生徒に対するイメージの違いを比較し、両大学の学生が将来子どもたちを支援する立場になると想定した時今何を学ぶべきかを推測する。また、有効的な支援方法（鹿児島県総合教育センター定義）と学生が思う有効的な支援方法を比較検討することによって、今後の保健室登校子どもへの支援方法のあり方について考察することを目的とする。

2. 調査時期

平成27年7月に実施した。

3. 調査対象

本研究では、福岡県のA大学で教育保健学について学ぶ2年生83人、B大学でスポーツ科学について学ぶ大学生、2年生129人、合計212人を対象とし、自記式質問用紙を使用し、無記名で調査を行った。なお、保健室登校の定義については、「常時保健室にいるか、特定の授業には出席できても、学校にいる間は主として保健室にいる状態」を言い、また「等」を付けてあるのは、登校した児童生徒が使用する部屋が保健室だけに限らず教育相談室や図書館等もある⁵⁾という考え方に沿った。

4. 調査項目

(1) フェイス項目

学生が持つ保健室登校等へのイメージの有り様が、いかなる要因によって影響を受けるのかを分析するために、本研究ではフェイス項目としていくつかの項目を設定した。すなわち、学年、養護実習の経験の有無、保健室登校等の児童生徒と同じクラスになった経験の有無、本人の保健室登校等の経験の有無について、選択式で回答を求めた⁵⁾。

(2) 保健室登校等の児童生徒に関する学生の意識

保健室登校等の児童生徒に対してどのようなイメージを持っているか、また保健室登校の実態をどう捉えているか調査した⁵⁾。イメージ調査については（高瀬,1986）の作成した「学校生活適応感尺度」⁷⁾を参考に作成し、両大学の学生に保健室登校の児童生徒の様子をイメージして貰うことで回答を得た。第1因子「学習意欲」、第2因子「友人関係」、第3因子「進路意識」、第4因子「教師関係」、第5因子「規則への態度」、第6因子「特別活動への態度」の6領域36項目からなる質問用紙を作成し、1. 当てはまらない、2. 当てはまるに分け回答を求めた。全ての質問項目は肯定的に尋ねられており、当てはまらないという回答割合が高いほどその質問項目に対してネガティブな感情を持っていると考えられる。A大学の学生とB大学の学生から得た回答から、どの領域に関することがネガティブなイメージを持ちやすいかを調べ両大学の学生が答えたネガティブイメージ上位5位までをそれぞれ比較し、どのような捉え方の違いがあるか検討する。なお、本研究では小学校から中学校にかけての児童生徒の様子をイメージして欲しいと口頭で説明した。

保健室登校等の実態についての調査項目は、鹿児島県総合教育センター（2002）が実施

した保健室登校等の実態調査を参考に、養護教諭養成課程の学生が保健室登校等の支援についてどの程度理解できているか実態と比較した^{5) 6)}。

5. 倫理的配慮

調査の回答は任意で無記名自由意志によるものとし、得られたデータは統計的に処理され目的外使用はしない旨説明をした上で実施した。

III. 調査結果

1. フェイス項目の分析

(1) 養護実習経験の有無

学生のうちA大学の学生2年生83人のうち、実習経験のある学生が80人(96.4%)、実習経験のない学生が3人(3.6%)である。B大学の学生は全員養護実習の経験がない。

(2) 保健室登校等の児童生徒と同じクラスの経験の有無

小学校から中学校までに、保健室登校をしている児童生徒と同じクラスになった経験があるかどうかについてA大学の学生で「ある」と回答した者は34人(41.0%)、「ない」と回答した者は49人(59.0%)だった。一方B大学の学生で「ある」と回答した者は69人(53.5%)、「ない」と回答した者は57人(44.2%)、「無回答」は3人(2.3%)であった(図1)。

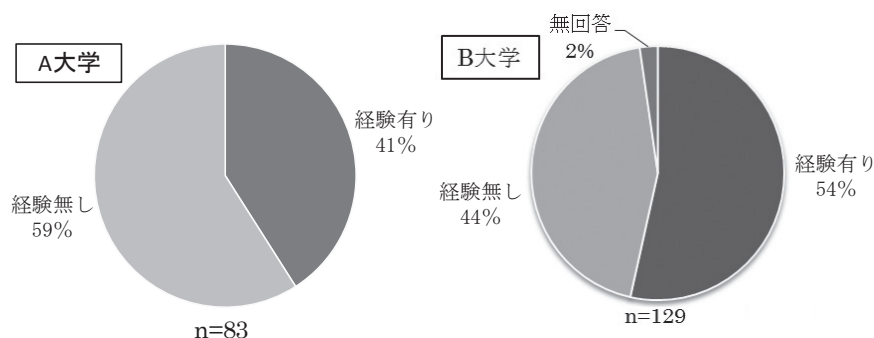


図1. 保健室登校等の児童生徒と同じクラスの経験

(3) 保健室登校の経験の有無

学生自身が保健室登校等の経験があるかどうかについて、212人のうち16人(92%)の学生が経験あり、A大学の学生は8人(4%)、B大学の学生は8人(4%)であった(図2)。

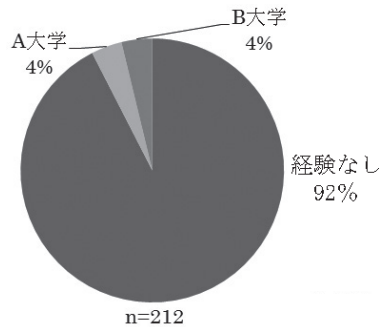


図2. 学生自身が保健室登校等になった経験の有無

2. 質問紙調査

(1) イメージ調査について

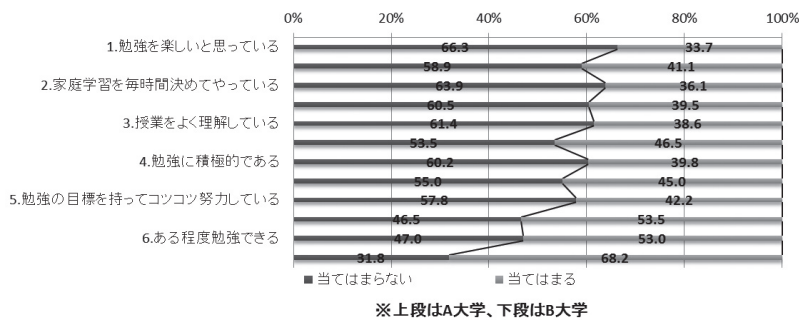


図3. 学習意欲に関する質問項目 (n=212)

①学習意欲に関する領域

この領域の全項目の質問の中で、A大学の学生は「勉強を楽しんでいる」という質問に対して当てはまらなと回答した人が55人(66.3%)で最も多かった。また、B大学の学生は「家庭学習を毎時間決めてやっている」という質問に対して当てはまらなと回答した人が78人(60.5%)で最も多かった。「ある程度勉強ができる」という質問項目に対し、当てはまらなと回答したA大学の学生は39人(47%)、B大学の学生は41人(31%)だった。またA大学の学生では6項目中5項目、B大学の学生では6項目中4項目において当てはまらなと回答した人の割合が多かった。

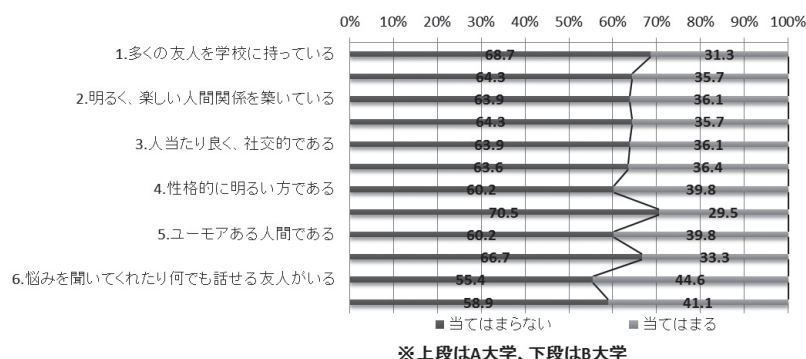


図4. 友人関係に関する質問項目 (n=212)

②友人関係に関する領域

この領域の全項目の質問の中で、A大学の学生は「多くの友人を学校に持っている」という質問に対して当てはまらないと回答した人が57人(68.7%)で最も多かった。B大学の学生は「性格的に明るい方である」という質問に対して当てはまらないと回答した人が91人(70.5%)と最も多かった。図4.に表した通り、どの質問項目に対しても50%を超える人の割合が当てはまらないと回答していた。また、「1.多くの友人を学校に持っている」、「3.人当たり良く、社交的である」という質問以外の項目においてA大学の学生よりもB大学の学生の方が保健室登校等の児童生徒に対してネガティブなイメージを抱いていた。なかでも「性格的に明るい方である」という質問項目において、当てはまらないと回答したA大学の学生50人(60.2%)とB大学の学生91人(70.5%)には僅かであるが差がみられた。

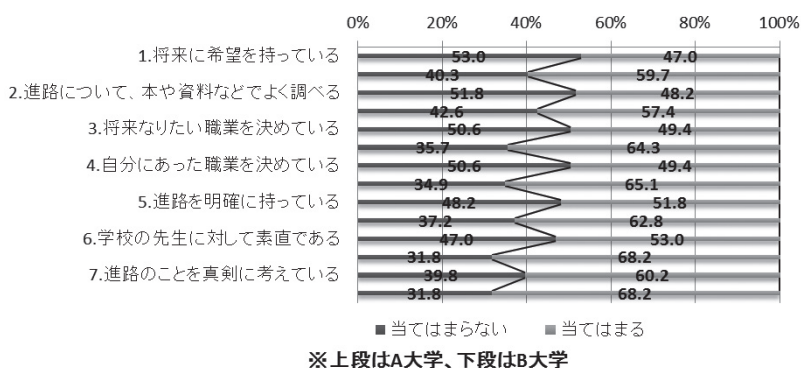


図5. 進路意識に関する質問項目 (n=212)

③進路意識に関する領域

この領域の全項目の質問の中で、A大学の学生は「将来に夢や希望を持っている」という

質問に対して当てはまらないと回答した人が44人（53.0%）で最も多かった。B大学の学生は「進路について、本や資料などでよく調べる」という質問に対して当てはまらないと回答した人が55人（42.6%）で最も多かった。また、A大学の学生では7項目中4項目において当てはまらないと回答した人の割合が多かったがB大学の学生では全ての項目において当てはまると回答した人の割合が多い傾向にあった。

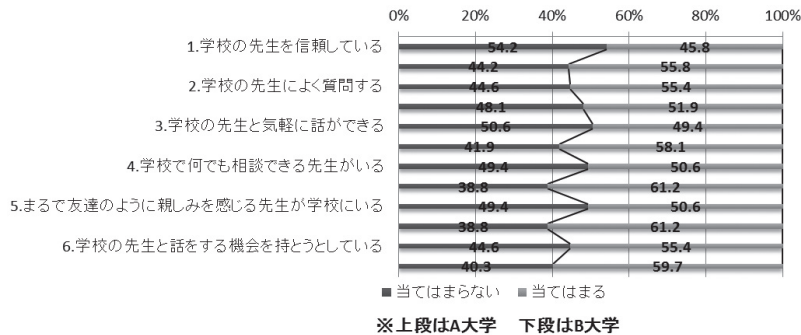


図6. 教師関係に関する質問項目（n=212）

④教師関係に関する領域

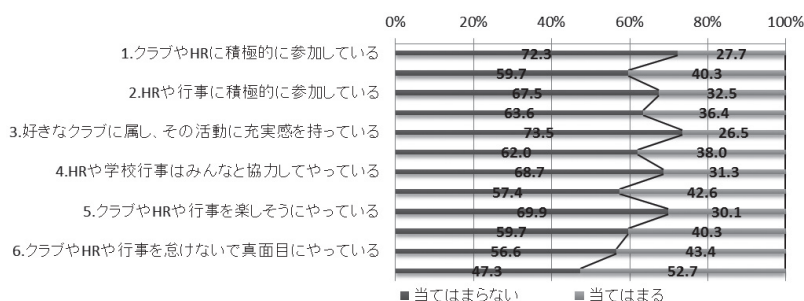
この領域の全項目の質問の中で、A大学の学生は「学校の先生を信頼している」、という項目質問に対して当てはまらないと回答した人が45人（54.2%）で最も多かった。B大学の学生は「学校の先生によく質問する」という質問に対して当てはまらないと回答した人が62人（48.1%）で最も多かった。A大学の学生は6項目中2項目において当てはまらないと答えた人の割合が多かったのに対し、B大学の学生は当てはまらないと回答した人の割合が多かった項目はなかった。

表1. 規則への態度に関する質問項目

A大学 (n=83)				B大学 (n=129)			
	回答数	回答割合(%)			回答数	回答割合(%)	
(1) 学校の規則に対して不満がない			(1) 学校の規則に対して不満がない				
当てはまらない	35	42.2	当てはまらない	37	28.7		
当てはまる	48	57.8	当てはまる	92	71.3		
(2) 学校の規則があるのは当たり前だと思っている			(2) 学校の規則があるのは当たり前だと思っている				
当てはまらない	23	27.7	当てはまらない	32	24.8		
当てはまる	60	72.3	当てはまる	97	75.2		
(3) 意識しなくても校則を守る			(3) 意識しなくても校則を守る				
当てはまらない	19	22.9	当てはまらない	31	24.0		
当てはまる	64	77.1	当てはまる	98	76.0		
(4) 学校の規則を守らなければならないという自覚を持っている			(4) 学校の規則を守らなければならないという自覚を持っている				
当てはまらない	18	21.7	当てはまらない	32	24.8		
当てはまる	65	78.3	当てはまる	97	75.2		
(5) 学校の規則を真面目に守っている			(5) 学校の規則を真面目に守っている				
当てはまらない	17	20.5	当てはまらない	30	23.3		
当てはまる	66	79.5	当てはまる	99	76.7		

⑤規則への態度に関する領域

規則への態度についての質問でA大学の学生もB大学の学生も全ての質問項目において当てはまらなないと回答した人の割合より、当てはまると回答した人の割合のほうが多かった。また、「学校の規則に不満がない」という質問に回答したA大学の学生48人（57.8%）を除く全ての質問項目において、規則への態度に肯定的なイメージを抱いている両大学の学生が70%以上いた。



※上段はA大学、下段はB大学

図7. 特別活動への態度に関する質問項目 (n=212)

⑥特別活動への態度に関する領域

この領域の全項目の質問の中で、A大学の学生は「好きなクラブに属し、その活動に充実感を持っている。」という質問に対して、当てはまらなないと回答した人が61人（73.5%）で最も多かった。B大学の学生は「HRや行事に積極的に参加している」という質問に対して、当てはまらなないと回答した人は82人（63.6%）で最も多かった。A大学の学生は特別活動への態度について、全ての質問項目に対して当てはまらなないと答えた人の割合が当てはまると回答した人の割合よりも上回っていた。

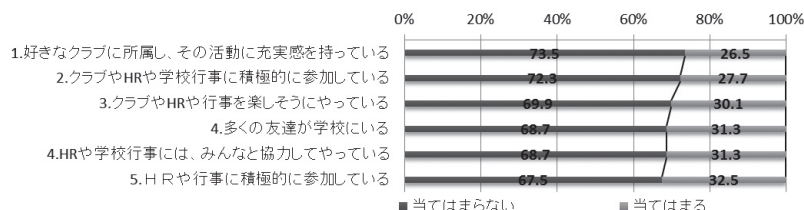


図8. A大学の学生が抱くネガティブイメージの上位5位 (n=83)

⑦A大学の学生が抱くネガティブイメージの上位5位

上位5位となっているが、4位が同率であったため6項目をピックアップした。

A大学の学生がネガティブイメージを抱いている項目のうち、「多くの友達が学校にいる」

という「友人関係」に関する項目以外の残りの5項目において「特別活動への態度」に関する領域から挙がっていた。また、最もネガティブな傾向にあったのは「好きなクラブに属し、その活動に充実感を持っている」という質問に対し7割を超える、61人（73.5%）が当てはまらないと回答していた。

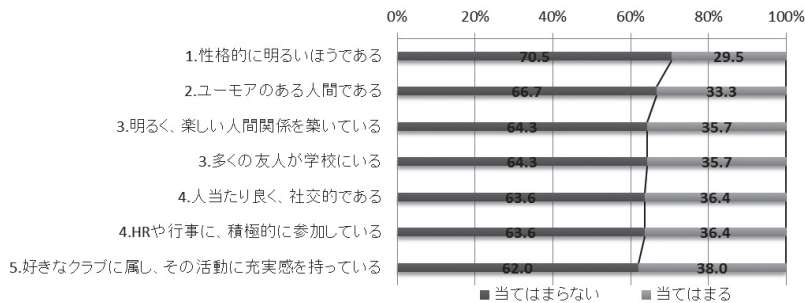


図9. B大学の学生が抱くネガティブイメージの上位5位 (n=129)

⑧ B大学の学生が抱くネガティブイメージの上位5位

上位5位となっているが、3位と4位が同率であったため7項目をピックアップした。

B大学の学生がネガティブイメージを抱いている項目のうち「友人関係」に関する領域から5項目と「特別活動への態度」に関する領域から2項目挙がっていた。また、最もネガティブな傾向にあったのは「性格的に明るい方である」という質問に対し7割を超える91人（70.5%）が当てはまらないと回答していた。

(2) 保健室登校等の児童生徒への効果的な対応と学生の意識の比較

鹿児島県総合教育センターが公表した保健室登校の有効的であったと思われる対応項目と比較検討するため、A大学の学生に対して保健室登校等の児童生徒への対応で、効果的であると思われるものを1つ記入してもらった。5位までの対応をすべてまとめると、表2および図10のような結果が得られた。学生によって効果的な対応と思われるものをみると、「⑭保護者と十分に連携しながら対応する」、「⑨担任や養護教諭が教育相談を行う」、「⑪具体的な対応方針を全教員が共通理解して対応する」、「④児童生徒の登校できる時間帯を認める」、「⑩心の教室相談員やスクールカウンセラーが教育相談を行う」の順に上位を占めている。

鹿児島県総合教育センターが公表した保健室登校の有効的であったと思われる対応は、「⑭保護者と十分に連携しながら対応する」、「④登校は、当該児童生徒の登校できる時間帯を認める」、「⑦保健室等では、出来るだけ本人の計画で過ごさせ、職員は見守るようにする」、「⑧保健室登校等へ友達が行けるように配慮する」、「⑪具体的な対応方針を全教員共通理解して対応する。」の順である。

表2. A大学の学生の保健室登校等の児童生徒への効果的な対応（有効な支援とは鹿児島県総合教育センターが定義する項目）（n=83）

効果的な対応	合計	順位	有効的な支援
⑭保護者と十分に連携しながら対応する	25(30.1)	1位	1位
⑨担任や養護教諭が教育相談を行う	12(14.5)	2	6
⑪具体的な対応方針を全教員が共通理解して対応する	10(12.0)	3	5
④児童生徒の登校できる時間帯を認める	7(8.4)	4	2
⑩心の教室相談員やスクールカウンセラーが教育相談を行う	7(8.4)	4	8
⑦保健室等では、できるだけ本人の計画で過ごさせ、職員は見守るようにする	5(6.0)	6	3
⑬総合教育センター、児童総合相談センター、医療機関等専門機関と連携しながら対応する	5(6.0)	6	9
⑫主としてかわかる教師を決めて対応する	4(4.8)	8	10
②朝、できかぎり本人が自分で学校に来るように促す	2(2.4)	9	11
⑤できるだけ教室に入るように促す	2(2.4)	9	13
①朝、教師や児童生徒が迎えに行く	1(1.2)	11	12
③学校の始業時刻を守るように指導する	1(1.2)	11	14
⑥保健室等では課題を与えて学習させる	1(1.2)	11	7
⑧保健室等へ友達が行けるように配慮する	1(1.2)	11	4

効果的な対応	人数 (人)
⑭保護者と十分に連携しながら対応する	25
⑨担任や養護教諭が教育相談を行う	12
⑪対応方針を全教員が共通理解する	10
④児童生徒の登校できる時間帯を認める	7
⑩相談員やカウンセラーが教育相談を行う	7
⑬専門機関と連携しながら対応する	5
⑦できるだけ本人の計画で過ごさせる	5
⑫主としてかわかる教師を決めて対応する	4
②自分で学校に来るように促す	2
⑤できるだけ教室に入るように促す	2
③学校の始業時刻を守るように指導する	1
①教師や児童生徒が迎えに行く	1
⑥保健室等で課題を与えて学習させる	1
⑧保健室等へ友達が行けるようにする	1

図10. 保健室登校等の児童生徒への効果的な対応（n=83）

また、図1で示した通り保健室登校を経験したことがある16人のうち有効回答が得られた8人の内訳をみてみると以下の通りである。

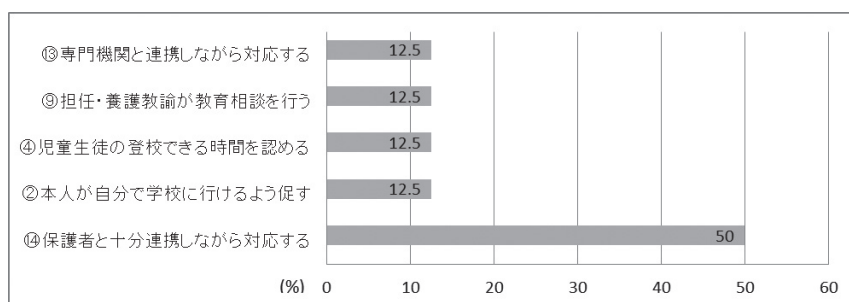


図11. 保健室登校等を経験したことがある学生が求める支援（n=8）

IV. 考察

1. 保健室登校等のイメージ調査について

岡山県教育庁義務教育課生徒指導推進室は、保健室登校を保健室は静寂とやすらぎのあるオアシス的な空間とし、養護教諭は不登校のサインを早期に発見してできる最前線にいる⁸⁾としている。このことから、保健室登校と不登校には切っても切り離すことができない関係性があると考えられる。教室に入れない様々な理由を持った子どもの支援のあり方や子どもと携わる上での教育者のあり方を考察するため、本研究では不登校児童生徒の現状や対応を参考にし、保健室登校等をしている児童生徒への指導・援助にも援用するという方針で分析を進めた。

(1)「学習意欲に関すること」についての領域では、A大学の学生では6項目中5項目、B大学の学生では6項目中4項目において当てはまらないと回答した人の割合が多かったため両大学の学生ともネガティブなイメージを持っていると考えられる。そしてこの領域では学習意欲を就学意欲として捉えることで考察することとした。実際、不登校だった生徒の就学状況をみると87.2%でありほとんどの生徒が高校に進学している傾向にあった。一方で、「勉強を通して、自分に対する自信がでてきた」という質問に対し肯定的な回答の比率が最も低かったため⁹⁾、不登校による勉強面での自信のなさが高校等への就学後も影響していると考えられる。よって、学生のイメージと現状の一致から児童生徒の学習意欲を向上させる取り組みが必要であると考えられる。

(2)「友人関係に関すること」についての要因では、どの項目においてもA大学、B大学の学生ともに5割を超える人がネガティブイメージを抱いていることが分かった。実際、「平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、小学校11.2%、中学校15.9%が「いじめを除く他の児童生徒との関係」について悩みを抱え不登校になったきっかけとして考えられている。具体的には、小学校の場合4番目に多い、中学校の場合3番目に多い理由として挙げられる²⁾。よって学生のイメージと現状の一致から児童生徒の友人関係を取り持つ取り組みが必要であると考えられる。

(3)「進路意識に関すること」についての要因では、A大学の学生は7項目中4項目において当てはまらないと回答した人の割合が多かったのに対しB大学は全ての項目において当てはまると回答した人の割合が多かった。よってB大学の学生よりA大学の学生のほうがネガティブに捉えている傾向があると考えられる。これは、養護実習等で保健室登校等をしている児童生徒との直接的な接触から、通常学級での授業に参加することができず学習進度に後れを取りがちな児童生徒の様子を目の当たりにしたことが強くイメージに影響したものと考えられる。進路意識についても曖昧な意思しかないと推測したと考えられる。しかし、現状では87.2%の生徒が高等学校等へ就学しており、「自分の力や性格に合った学校にめぐり会えた」と回答した生徒が70.9%⁹⁾ いたことから生徒の力を信じ個性の伸長を図ることが重

要だと推測する。以上の結果からA大学の学生のイメージを向上させる必要があると考えられる。

(4)「教師関係に関すること」についての要因では、A大学の学生は6項目中2項目において当てはまらなないと回答した人の割合が多かったが、その差は僅差であった。これに対し、B大学の学生は全ての項目において当てはまると回答した人の割合が多かった。すなわち、A大学の学生の方がB大学の学生よりも多少ネガティブに捉えている傾向にあることが分かった。しかし、両大学の学生とも極端なイメージの違いがみられなかったため、ネガティブな感情を持っているかどうか分からないと考えられる。それでも将来子どもの健康教育を支える役割を担う可能性の高い学生たちにとって「教師関係」に関することについてもっと肯定的に捉える必要があると推測される。実際、文部科学省は不登校に対する基本的な考え方として働きかけることや関わりを持つことの重要性を述べている¹⁰⁾。このような姿勢でいることは保健室登校等をしている児童生徒と関わる時にも同じことがいえるであろう。そのような現状においてネガティブなイメージを持ったまま児童生徒と接することは教育上良い効果を生み出さないと推測するため更なるイメージの向上が望ましいと考えられる。

(5)「規則への態度に関すること」についての領域では、「学校の規則に不満がない」という質問に当てはまると回答したA大学の学生48人(57.8%)を除く全ての質問において、当てはまると回答した両大学の学生が70%以上いたことから保健室登校等の児童生徒が規則に対してあまり不満を持っていないイメージを抱いている傾向にあることが分かった。実際小学校では0.6%、中学校では2.0%の児童生徒²⁾が学校に対して不満を持っているがイメージと実情にはあまり差がない傾向にあると推測する。

(6)「特別活動への態度に関すること」についての領域では、「クラブや行事を怠けないで真面目にやっている」という質問に対してB大学の学生では当てはまると回答した人が多かった。また、これ以外の全ての質問項目において両大学の学生とも当てはまらなないと回答した人の割合が当てはまると回答した人の割合を上回っていた。すなわち両大学の学生ともネガティブな傾向を持っていたことが分かった。しかしA大学の学生とB大学の学生のイメージの違いについて考察すると、当てはまると回答したどの質問項目においても、B大学がA大学を上回っていたことからA大学よりも多少肯定的な意識を持っている学生がいたことになる。上記のようになった結果として考えられるのは、保健室登校等の児童生徒が普段保健室で過ごしていることや、別室で授業を受けている様子から人と関わるのが苦手だったり、人と協力することが困難である等のイメージがついてしまったことが考えられる。しかし、実際は「クラブ活動、部活動等への不適応」のために悩んでいる児童生徒は小学校では0.1%、中学校では2.1%²⁾であったことからイメージと実情の相違がみられると考えられる。よって両大学の学生のイメージを改善する必要があると考えられるが、特にA大学の学生のイメージを変える必要があると推察する。

(7) A大学とB大学の学生が抱くネガティブイメージの上位5位

A大学の学生が最もネガティブに捉えていた傾向にあったのは「特別活動への態度」に関する要因、B大学の学生が最もネガティブに捉えていた傾向にあったのは「友人関係」に関する要因だった。そこで双方の大学の学びの特徴を比較すると、A大学は将来養護教諭を目指す学生が多いことから、子どもの成長や発達の過程を学び健康を支援する基礎的な知識を養うことをベースにしており、中でもヘルスカウンセリング教育等児童生徒のメンタルヘルスの保持増進を促すための学びが展開されている。一方のB大学の学生は、将来スポーツ指導者になる可能性が高い学生が多いことから、スポーツ全般について様々な側面から学びを深めている。具体的には、運動生理学やスポーツ社会学、基礎トレーニング法等が挙げられ、スポーツを通して判断力、協調性、豊かなコミュニケーション能力等の育成に力を入れている。それらを踏まえると両大学で行われている学問を、それぞれの大学で学んでいくことでA大学は「特別活動への態度」に関するイメージの向上、B大学では「友人関係」に関するイメージの向上ができると推測される。具体的には、A大学はスポーツを通して、仲間や友人と協力し合うことで自分自身が特別活動等に参加することの意義や楽しみを見出す¹¹⁾。学校行事にはスポーツを主体とした体育祭や球技大会、マラソン大会等の特別活動があり通ずる所があると考えられる。B大学はヘルスカウンセリング教育のうちの一つにピア・ヘルピングがあるが、その活動を通して仲間同士の助け合い活動によって相手に対する感受性を高める¹²⁾。また、両大学の学生が交流し、合同授業を受けることでお互いに良い刺激を受け、自分自身が変わることによって捉え方や考え方の変化につながるのではないかと推測される。そして、実際の実情と学生のイメージに違いがあった要因もあることから保健室登校をしている児童生徒の実態を知る必要があると考えられる。以上のことから、保健室登校の児童生徒と触れ合う機会を設けたり、ボランティアに参加するなどの実体験の場を増やすことが必要であると考えられる⁵⁾。

2. 鹿児島県総合教育センターが定義定義の保健室登校等の児童生徒への効果的な対応と学生の意識の比較

養護教諭養成課程の学生にとってアンケートでは同率の順位が存在したため、全体の順位は11位止まりとなっている。学生の意識と鹿児島県総合教育センターが定義する実際の効果的な対応で一番異なるものは「⑧保健室等へ友達が行けるように配慮する」であり、前者では11位に、後者では4位にあげている。このことは、保健室登校等のイメージ調査で述べた通り、両大学の学生は「特別活動への態度」と「友人関係」に関することについてネガティブな感情を抱いている傾向にあった。また、学生が有効だと思った対応の上位5位以内には、「児童生徒の登校できる時間帯を認める」以外の質問項目において大人が主体となった支援方法が挙げられている。つまり学生は、保健室登校等をしている児童生徒とその周りにいる子どもたちとの横の関係性よりも、教師と当該児童生徒の縦の関係性を重視している

傾向にあった。以上の結果から、養護教諭として児童生徒同士の仲間づくりを支援する活動や助け合い活動等友人関係を取り持つ役割を担っていくことが重要だと考えられる。そして当該児童生徒だけでなくその友人まで配慮をする必要性があると推測される。また、学生が有効的な支援であると回答した上位5位の中に「⑨担任や養護教諭が教育相談を行う」、「⑩心の教室相談員やスクールカウンセラーが教育相談を行う」のように、児童生徒のメンタルヘルスを保持増進させる健康活動の展開が重要視されていることに気が付いた。その背景には、①学生自身がメンタルヘルスに関する学びを深めその重要性を理解していること、②「学校保健安全法に養護教諭を中心として学級担任等が相互に連携して行う健康相談が明確に規定されるなど、個々の心身の健康問題の解決に向けて養護教諭の役割がますます大きくなっている¹³⁾。」と文部科学省が述べているように、健康相談活動の重要性が増している。このような実情を講義や養護実習で知り、その活動の重要性を理解していた傾向にあることが考えられる。

「⑭保護者と十分に連携しながら対応する」については現場の有効的な支援と学生の考え、また実際に保健室登校を経験したことがある学生が最も効果的な対応だと回答し、学生が有効的な支援に沿った考えを持っていたことが分かった。数見らは、保健室登校の意義として、保健室は家庭の子育てと学校での人間関係づくりの架け橋にならねばならないとしている¹⁴⁾。子どもが学級に馴染めず保健室登校になってしまうことは、保護者にとって、想像もつかないぐらいショックな出来事だと考えられる。こうした状況の中で、保護者の気持ちを受け止め、しっかりと傾聴することから保護者と学校との信頼関係づくりが始まると推測するため、A大学の学生は保護者と連携することの重要性を理解している傾向にあることが分かった。

学生による保健室登校等の児童生徒へ効果的な対応と思われる上位6位までは有効的な支援方法と同じ傾向であったが、「保健室等へ友達が行けるよう配慮する」において、学生はあまり重視していない傾向にあることが分かった。

V. 総括並びに結論

今回の調査で、以下のことが分かった。

AとBの学生がもつ「友人関係」「特別活動へ参加する態度」のネガティブイメージは将来の子どもの健康教育に大きな影響を及ぼすことが推測され、大学教育や体験学習・実習などを通して、それぞれの領域の学びの足りない部分を相互補完することが効果的な保健室登校等の支援をする上での人材養成に繋がるものと考えられる。また、A大学の学生はおおよそ保健室登校支援について理解している傾向にあったが、児童生徒同士の仲間づくりのための支援やその友達への配慮を行っていく必要があることを学んでいかなければならないと考えられる。

この研究の書面調査は、協力を得られた福岡県内の学生を対象としたことから、全国の学校における保健室登校等へのイメージ調査、支援のあり方に係る全体像を明らかにできた訳ではないが支援のあり方についてどのような取り組みを行えばよいのかの一端は知ることができたと考えられる。

VI. 謝辞

本研究を進めるに当たり調査に協力して頂いた関係大学各位に深謝する。

VII. 参考文献

- 1) 文部科学省、平成25年度学校基本調査報告書、(2013)
- 2) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課、平成25年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査について10月16日、(2014)
- 3) 杉浦守邦、「保健室登校」の指導マニュアル、東山書房、(1992)
- 4) 籠谷恵、岡田加奈子、塚越潤、中学校保健室登校支援における養護教諭の行動プロセス：学校保健研究、55 (2013) 13～23
- 5) 有村信子、保健室登校等の児童生徒に関する学生の意識、鹿児島純心女子短期大学、34 (2004) 11～21
- 6) 杉元羊一、田上桃江、迫田孝志、不登校児童生徒への指導・援助の在り方に関する研究—保健室等登校児童生徒への対応を通して—、鹿児島県総合教育センター研究紀要、106 (2004)
- 7) 堀洋道、山本真理子、松井豊、心理尺度ファイル、垣内出版、(1994) 577～581
- 8) 岡山県教育庁義務教育課生徒指導推進室、新たな不登校を生まないための不登校対策資料、未然防止・初期対応Q&A28、(2014)
- 9) 文部科学省、不登校に関する実態調査—平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書—、不登校生徒に関する追跡調査研究会7月9日、(2014)
- 10) 文部科学省初等中等教育局、不登校への対応の在り方について5月16日、(2003)
- 11) 宮城勇、本学体育系クラブ学生のスポーツ意識や活動に関する研究、沖縄国際大学教養部紀要、13 (14) (1986) 73-99
- 12) 中出佳操、ピア・サポーター養成プログラムに関する一考察 (II)、人間福祉研究、5 (2002) 85～92
- 13) 文部科学省、教職員のための子どもの健康相談及び保健指導の手引、6 (2011)
- 14) 数見隆生、藤田和也、保健室登校で育つ子どもたち—その発達支援のあり方を探る、社団法人農山漁村文化協会、27 (2005)

The opinion poll about the health care room school attendance of the child student in a university student learning health education

Chikae MOURI, Chiaki ITAKURA, Noriko YOSHIMOTO, Yoshiaki MATSUMOTO

Advanced course of child care and education at Kyushu Women's Junior College

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

ABSTRACT

According to "the school basics investigation," as for the child number of enrolled students on the grounds of "the school non-attendance", in the elementary school, approximately 24,000 people, the junior high school were approximately 95,000 people among long-term absentees of 2013.

Therefore we decided to analyze the present conditions and a problem in a document investigation, and to examine the effective support method and the way as the leader of the person of health religion what kind of consciousness a student of University A which learned health education from education health studies and a student of University B which learned from a sport science had for the child student who did health room school attendance.

The student of University A was found to tend to arrest the student of University B about the thing about "friend relations" most negatively about "a manner to participate in extracurricular activities".

The major difference by effective correspondence (the 4th rank) that the real Kagoshima Board of Education defined as the consciousness (the 11th rank) of the student in University A was an item "to consider so that a friend could go to the health room".

It is predicted by the above-mentioned results that the negative image of the "friend relations" "manner to participate in extracurricular activities" that the student of both universities has has a major influence on the health education of future children, and it is thought that we are connected for talented person training when it supports effective health room school attendance to supplement a part lacking the learning of each region through university education or an on-site training, training mutually.

Keywords : health care room school attendance, health education, sport science